

シリーズ南城物語 2

浅野誠 2012年6月作成

南城の 芸能・工芸・芸術

目次

字玉城の獅子舞 P 1 2

a.	南城祭り	2
b.	ハーリー	7
c.	青年芸能フェスタ	10
d.	半島芸術祭 in 南城	27
e.	陶芸	33
f.	木工・木造建築	40
g.	織染	48
h.	多様な工芸	54
i.	絵画	59
j.	音楽・シュガーホール	61



a. 南城祭り

2008年11月、第一回南城祭が開かれた。グスクロード公園が会場だ。試行錯誤で、どんな方向へと発展するのか、これからの課題だが、第一回としては上出来ではないだろうか。

4年前の最後の玉城祭は、身近さという特徴があったが、今回は4町村合併後であり、この4町村の交わり具合が問われる。それにしても、各町村、いろいろとあり、同時にならぶと、各町村の特徴がわかる。

物産展もあり、農漁業の方々の展示即売、また加工品の展示即売などにも面白いものがあった。

屋外での「大里ムーチャー由来伝説」のウチナー芝居は面白かった。



プロの役者に加えて、大多数は地元住民が演じる。泣かせる演技だ。

屋外で演じるが、戦後のウチナー芝居はこんな風だったのだろうと推測する。背景も、知念半島をのぞむ大里の実際の光景でつくってある。

場面は鬼になった兄を、泣く泣く「退治」する妹の場面。



ウチナー芝居の隣では、巨大なムーチャーづくりが行われる。まず、巨大な鍋でムーチャーが蒸される。蓋をクレーンでつりあげる。湯気がもうもうと立ちあがる。





次に、ムーチーそのものをつりあげる。

何百人という人ばかりで、写真にうまくうつらない

この後、切り分けて、皆さんに配布となる。



出店めぐり

・奥武島の店では、「ソージリ」（サメの肉）に出会う。たくさん入って一袋1000円。

・果樹の出店では、おすすめの果樹ということで、アテモヤを購入。育て方も習う。4月から年四回収穫とのこと。剪定が重要のようだ。2年後から2個ぐらいだが、収穫開始。

・イラブー(海蛇)汁をいただく。久高からの出店だ。話は知っていたが、食するのは初めて。切ったイラブーの皮がそのまま見える。

中味は、イラブー、こんぶ、ソーキ、大根



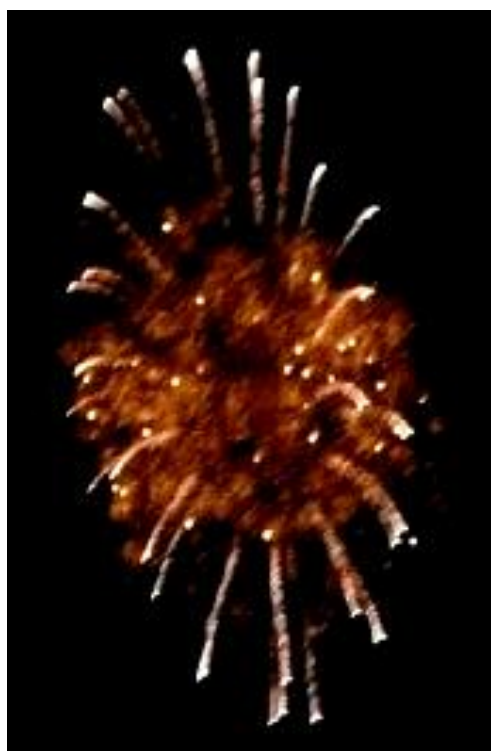
味には、コクがある。

お店の人の話だと、食べた後、体が軽くなる
とのことだ。



南城祭の最後は、**花火**。

我が家屋上からの撮影。直線距離は1キロぐらいか。会場の放送も聞こえる。





b. ハーリー



毎年、旧暦5月4日に開かれる。南城市内でもいくつか開かれるが、私は、家の目の前の奥武島ハーリーをもっぱら観戦する。

上の写真は、2007年のものだ小学生レース。当日、玉城小学校は休日だ。

上は、2008年の準決勝。

選手を近くで見ると筋骨隆々の人ばかり

右はレース表だ。予選タイム上位9チームで準決勝

奥武島職域ハーリー大会

優勝

1レース	2レース	3レース
1. 玉城小学校 (2:19.11)	1. 玉城小学校 (2:19.11)	1. 玉城小学校 (2:19.11)
2. 玉城小学校 (2:20.12)	2. 玉城小学校 (2:20.12)	2. 玉城小学校 (2:20.12)
3. 玉城小学校 (2:21.13)	3. 玉城小学校 (2:21.13)	3. 玉城小学校 (2:21.13)
4. 玉城小学校 (2:22.14)	4. 玉城小学校 (2:22.14)	4. 玉城小学校 (2:22.14)
5. 玉城小学校 (2:23.15)	5. 玉城小学校 (2:23.15)	5. 玉城小学校 (2:23.15)
6. 玉城小学校 (2:24.16)	6. 玉城小学校 (2:24.16)	6. 玉城小学校 (2:24.16)
7. 玉城小学校 (2:25.17)	7. 玉城小学校 (2:25.17)	7. 玉城小学校 (2:25.17)
8. 玉城小学校 (2:26.18)	8. 玉城小学校 (2:26.18)	8. 玉城小学校 (2:26.18)
9. 玉城小学校 (2:27.19)	9. 玉城小学校 (2:27.19)	9. 玉城小学校 (2:27.19)



左の写真は、レースの難所である U ターンシーン。

周りを歩いていると、知人に会ってばかりである。立ち寄って、ビールごちそうになったりする。

知人がレースにでてきたりもする。

右は、2010 年 1 月に撮影した新しいハーリー船。

下は、2011 年のハーリー。我が家の仕事部屋にいますと、奥武島のスピーカーが大きく聞えるので、仕事を中断して撮影。8 時 45 分ごろ、スタートしたばかり。



5 月末の台風で、海岸の防風林がスケスケになったので、我が家は絶好の観覧所になる。

2010年8月29日 奥武島ウミンチュ祭り

出店がいっぱい。

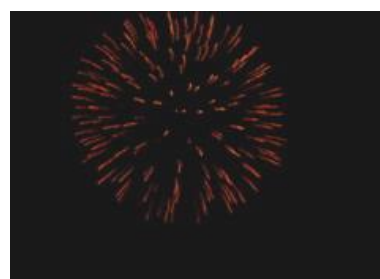
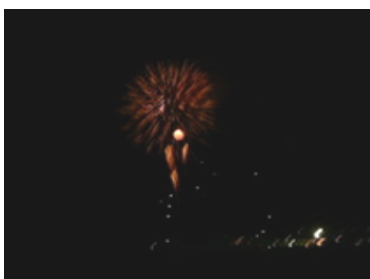
ハーリーも行われる。写真は、私の仕事部屋からズームで撮影。南風によって、実況中継のスピーカーが鮮明過ぎるほど聞える。

「1位は～～チーム、2位は～～チーム」



昨夜はカラオケ大会。これまた、我が家はよく聞こえる。聞えすぎだ。

最後は花火。我が家は花火見物特等席。数百メートルしか離れていない。



c. 青年芸能フェスタ

南城市青年会連合会が、毎年開催する芸能フェスタは、実にいい。グルクロード公園で開催。初めて見た 2008 年のものから紹介しよう。11 月 23 日に開催。3 時から 9 時までと、長時間続くので、4 時 30 分までの伝統芸能の部だけ見た。



左は、仲村渠青年会の揚作田。扇舞いの形式で、入道頭巾に鉢巻きというのは独特らしい。

右は、垣花青年会の舞方棒

伝統芸能は、6 つの青年会が演じた。島尻各地には、棒術の伝統がある。

私が住む中山にも、有名な棒術があったが、30 年以上前に途絶えたとのこと。復活を期待したいが。





志堅原青年会の棒
術

志堅原青年会の醜童（しゅんどう）。美女と醜女が自慢し合うユーモラスな踊りということだ。

南城市青年連合会は、南城市誕生後にスタート。市になって



以降誕生した青年会もあり、現在、半分ほどの字で活動中ということだ。



字玉城の獅子舞

私が住む中山の隣の字玉城と中山は兄弟字とも言うべき関係で、この獅子頭は、中山にもあるとのことだ。中山の獅子舞の復活を期待する。



この獅子舞は、これまで字公民館前広場以外には出たことがなく、この時が初外出ということだ。



13:







知名青年会 胡蝶の舞

これはすごい！ 花の役と蝶の役が対になって踊る。

昭和初期から始まったとのこと。

大変な体力が必要で、25歳以上では体力が持たないと、いわれているとのこと。







前川青年会 あやぐ

プログラムには、「4名の男子が腕をからみ合わせ押し合ったり引き合ったりする姿は、競い合いながらも協力する『ゆいまーる=協同』の心を表現しているとして人々から親し

まれている」と書かれている。





1872年に前川の人が創作したとも書かれている。

力強い演技だ。

夜はエイサー。

2009年9月
開催のものを掲載
しよう。

奥武島青年会

数千人の観衆だ
が、人口4万人の南
城では、驚きの数だ



沖縄の若者がエネルギーを出す最高の機会だ。



船越青年会 トリを飾るだけあって、さすがである。



最後のカチャー

シーは、雨がぽつぽつりぽつりしはじめて、数分しかなかったが、たくさんの方が飛び出す。



私も行こうかと思った時には
終わり。残念

最後はやはり花火。

我が家の屋上からグスクロード公園の花火を見る



直線距離で1キロぐらいか。

雲が出ていて、条件は悪かったが、まあまあの写りだ。



南城には、シマ（字）ごとの芸能が豊富にある。

2009年2月15日、「南城市芸能公演村芝居ざんまい」が、シュガーホールにて開かれた。写真は、終了後、玄関で出演者が見送りする場面だ。

演目は、村芝居三つと、創作沖縄芝居。

村芝居は、糸数の掃除さーぶー、津波古の酒飲狂言、久手堅の組踊「鏡の割」。

創作沖縄芝居は、「約束」。

観る人も地元の人がほとんど。すべて方言。私は2割ぐらい理解。

500人収容のシュガーホールに、開演30分近く前に行ったが、もう満員に近い状態。一番前の隅っこに席を取る。立ち見の人も多かったようだ。すごい人気である。前売券1000円。当日券1500円。この1000円というのは、各字でおこなわれる村芝居の入り口で渡す祝儀の額と同じだそう。



シュガーホールでやるといっても、字公民館での村芝居に近い雰囲気だろう。観客の反応がどんどん出てくる。

想定以上・想定外の演技に大きな喝采・笑いが巻き起こる。出演者は、ほぼアマ。といっても長年、村芝居にたずさわっている人には、セミプロというべき人も多かった。初舞台の人也多そう。中学生・小学生もいた。

終了時の見送りに、観客から出演者に「うまかったよ」と声をかけられて喜ぶ出演者の姿もみられた。

村芝居には、100年ほど、あるいは100年以上の歴史がある。組踊などは、どうやって、こういう水準のものを維持してきたのか、その字の蓄積・力量を感じるものもある。また、喜劇には、字の娯楽であった長い歴史がある。

こうした創造の基盤があるからこそ、多くの沖縄出身の、テレビなどを含めて全国的・世界的に活躍している芸術家・芸能家・タレントを生みだしているのだろう。そうしたものが、「高尚」な世界ではなく、人々の暮らしと結びついているところが、沖縄のすごさである。南城もそうしたところなのだ。

その意味では、シマおこしと人生おこしとが結びついているのだ。村芝居に象徴される、こうしたシマの文化継承創造を、「シマおこし=沖縄おこし」「人生おこし」として、どう展開していくか、そのことに注目していきたい。

2010年10月末、**奥武島
観音堂 395年祭**が開かれ、芸能をいろいろと楽しむことが出来た。





棒術

下は、小学生たち



余談 私は、ほぼ月に一回、マッサージに行くが、マッサージ師さんと、よくユンタクする。ある時、地域の昔の話をたくさん聞く。そのなかで興味を引いたことに、マチボーがある。巻棒という意味で、南部に広く伝わる棒術だ。100人くらいが二つの渦をつくって、「巻いて」するもの。中山でも以前行われ、有名だったそうだ。

字ごとにやりかたが異なり、字以外には教えなかったという。中山にこっそり「盗み」に来た人がいるくらいだったという。

マッサージ所があるのは志喜屋だが、しばらく前に数十年ぶりに行ったという。その志喜屋の人と結婚し、志喜屋に住んでいた男性が、古老にマチボーを教えてくださいと頼んだが、断われたと言う。

南部の棒術は、中部のエイサーに匹敵するものようだ。



スーマチ





白太鼓（ウスデーク）



d. 半島芸術祭 in 南城

近年の南城の工芸・芸術・芸能というと、半島芸術祭 in 南城が注目される。

私は、第一回芸術祭で、34の全会場を訪問して楽しんだ。人口4万の小さなところによくぞこれだけの芸術家・工芸家があつまっているものだ、と感心するばかりだった。

陶芸などは、芸術祭参加不参加を問わないで数えれば、20ほどの陶房がある。しかも皆個性的だ。超ベテランで名の知れた方から、新人とも言うべき人たちまで様々だ。まとまって「南城焼」といったものがあるわけではなく、作風は実に多様だ。これだけ多様な人たちが集まり、年数が重なっていくと、かなり注目できる世界が生まれてくるのではないかと期待する。

南城に限らず、沖縄の芸能音楽工芸芸術は、歴史的伝統を引き継ぎつつも、現代における創作創造に熱心であるとともに、それにかかわる人に、プロだけでなくたくさんの素人が参加していることに大きな特徴をみることができる。

この芸術祭は、知念在住の有志の方々が発案運営して、2008年に始まった企画で、おおいにヒットしている。南城地域の工芸家がこれでおおいに盛り上げられたと思う。

陶芸などの芸術ジャンル別のものは、後に掲載し、ここではジャンル別分類が難しいものをまず掲載しよう。





山の茶屋前の広場に、たくさんの手作り小屋
ほっこり村が誕生。 前ページと左の写真
増築が続き、4日後にはさらに増えた。

知念岬公園には、南城市の中学生たちが制作
したものを展示

リング・リング・リングという名前



西大学院の呈茶



写真は会場の庭

ここからは、浅野恵美子たちがした企画について紹介しよう。

「私たちは、玉城中山で、近所つきあいを大事にして暮らしております。好きな人が集まって、海清掃や飲み会をしたり、合唱をしたりしています。

芸術祭に参加するにあたって、パッチワーク、生花、うきヒーリングアートなどの暮らしと心を豊かにする活動を生活アートと名付けました。展示する作品そのものは、アートと呼ぶのは気がひけますが、この機会に、私たちの思いを感じてもらい、近所の方だけではなく、いろいろな方と出会い、交流したいと考えました。

第一部は、展示とお茶とおしゃべりを楽しみます、第二部では、井上靖氏のソロを聞き、いい歌を皆で歌って盛り上がる予定です。ハーブや小物や写真などの販売も予定しています。」

宮平和美さんのパッチワーク作
「テーブルクロス」



訪問者一号

パッチワーク・小物の展示・即売コーナー



オカリナの演奏



野菜とハーブのコーナー



野菜はメンバーのおじさんが作った
超安価で売り切れ、急いで品物を追加するほどだった。

ハーブは私の「作品」

この企画には、昼間の部200名近く、夕方コンサートには50名余りと、予想以上の方が訪問された。女性企画だけに、圧倒的に女性だった。



翌2009年は、中山のさらに多くの女性たちを巻き込んで企画。



2009年のプログラムを紹介しよう。

暮らし・遊び・生活アート展&お茶会

近所の皆さん、お友達の皆さん、どうぞ気楽に遊びに来て下さい。

どなたでも大歓迎です。☆内容

- 1、 作品の展示販売・・・パッチワーク・生花・うきアート・写真等
- 2、 手作り布草履教室



写真は布ぞうり作り光景

- 3、 手作り服の紹介・手作り小物の販売
- 4、 保存野菜料理などの販売
- 5、 お茶（中国茶・ハーブティーなど）とおしゃべり
- 6、 リサイクル販売（お家で使わないものの持ち込み歓迎）
- 7、 オープンハウス（自宅・庭・景色など）

主催 中山女性会（協賛 中山婦人会
中山子ども会）

2008年第一回の際の半島芸術祭全体の打ち上げ会

半島芸術祭に行政も応援したが、財政支出はゼロだ。市民の自発的動きが作り出した点で大いに評価されよう。

芸術祭をきっかけにできた出会いが、新しい物語を生み出していこう。



e. 陶芸

ここからは、ジャンルごとに紹介していこう。まず陶芸だ。

玉城焼 我家から徒歩8分。我家の玄関のシーサーもここで製作してもらった。

写真は、私たちの注文品を成形する玉城焼当

主



新作のランプシェード

ハスの花で、極楽浄土のイメージ



クラブ陶スタジオ K'S

窓からの海の景観もすごい

我が家から徒歩15分 浜辺の茶屋
のすぐ近く。玉泉洞でも活躍

作品は、定評のランプを始め、芸術レ
ベルの日用品が多い。

写真は、我が家の食器や
古酒甕として活躍してい
るもの





明王窯の登窯

新里ビラ近く。

明王とは不動明王のこと。

研究職・公務を辞して、この道へ
味わい深い作品制作へ。

実力の持ち主なので、最初から素
晴らしい作品が登場。

卓陶窯の登窯

佐敷との境目の大里

中城湾を見渡す高い所。



卓陶窯のシーサー

キズ物だが、気にいって購入。

かなり大きい。

現在、我が家の庭に鎮座している。



陶房田 Den

佐敷の津波古

女性陶芸家

涯山窯

知念の具志堅

南城草分けの著名な陶芸家

写真は陶房・ギャラリーの入り口



陶芸工房かみや

佐敷の国道沿い

なかなか個性的作品

現在、私の愛用する物の

一つ

パワフルな女性作家

陶芸工房彦

壺屋で修行した陶芸家。
生活用品を中心に制作



巨大なクース（古酒）甕が並ぶ久手堅窯



数斗も入る酒瓶ばかり。ほとんどが注文制作とのこと。登窯で年二回ほど出す。

ならんだ作品をみながら、これは凄いと感心。

といっても、窯出しをすれば、すぐに引き取られるので、ここにあるのは少ない。

一宮侑南蛮焼知念窯

超高級品。

写真の上のものなどは、とても薄い
焼き物に漆塗り（息子さんの一宮現さ
んの作品）

観光客でごった返す「くるくま」の
隣。



樋の龍

垣花樋川の近く。
作品は、とても繊細
で独自の世界を感
じる。高級感も漂う。

f. 木工・木造建築

木工が多いのが、最近の南城工芸の特徴か。そのなかで付き合いが長いのは、木創舎（きづくりや）。ニライカナイ橋近くの半島の丘上にあるギャラリーに展示されている机がたいそう気に入った。そこで近くの工房まで案内してもらって、制作過程を見せていただいた。

私は、以前から木製の手づくりの机が欲しかった、20年、30年来の夢だった。長い間、沖縄にはそういう工房が見当たらなかった。本土から製品を送ってもらうには、経費がかかりすぎる。

それが、この工房訪問から現実の話になってきた。2メートル越す希望サイズで作ってもらうことにした。なかなか適切な材木が見当たらず、1年近くかけて完成にいたった。

写真は、木創舎制作で私の仕事部屋に鎮座する机



木彫屋

家族3人が各々の個性で作しておられる。ご主人は彫刻家出身で、素晴らしい家具を作っておられる。

富里に工房・ギャラリーがある。



木彫屋の花器

花器を購入し、帰宅して生ける



木彫り工芸品の村山工房

我が家から徒歩10分の字玉城

お聞きすると、北海道で10年間修業なさったということ。那覇出身だが、十数年前、玉城に移住なさった。

とても可愛い動物たちを中心に彫っておられる。



一輪挿しを抱くジュゴン

現在、私の仕事部屋で暮らしている。





ふくろう1



ふくろう2

2センチくらいの小さなもの



木工房 百名の国道沿い
 沖展で初めて設けられた木工の
 部で賞を受けた作品が並んでい
 る。

私は木工が好きだ。木の温も
 りが何とも言えない。

木工作品 フクロウと
コマ

シュガーホール前の
「さんさんいち」で、
東風平木工芸組合・
木の工房楽樹が開い
ているものだ。



出会った主は、お互いの顔に見覚えがあった。3~4年前の半島芸術祭「ほっこり村」で出会った方だった。

ここでは、おもちゃを中心に小物を作ることを中心にしていた。

例によって、フクロウ収集家の私は、フクロウを二つ選んだ。シンプルでなかなか味わいのあるものだ。もう一つは、孫のために、コマを三つ買った。よく回る。





最近、木造建築が注目され、あちこちに見るようになった。以前のように、台風対策にはコンクリートでなければ、というのでもないのだ。木造でも十分耐えられるということだ。

我が家の隣人に、木造建築専門の「**建築意思**」を主催する若手建築家山口さんがいる。彼の作品を二つ紹介しよう。

「姉と弟の家」 山口さんが手がける建築はすべて木造だ。

有名な宮崎の飢肥杉を取り寄せて建築。

杉の香が魅力的。

設計施工まで一貫して進める。

外壁は、杉を焼いて貼りつけてある。

室内は、木の素朴な感覚を生かして、広々としている。木製雨戸の「レール」部分が、縁側風になっている。生活感と高級感が合体。

風が通り涼しさを作りだす。沖縄風建物でもある。





「赤い瓦の家」

百名の高台
に、知人宅を
新築

瓦は旧家の
瓦をそのまま
使用。

沖縄風
のシンプ
ル美を感
じる



天井を貫く立
派な木材



室内から海を見る（奥武島方向） 額縁効果が見事だ。



g. 織染

南城では、この分野も比較的新しいように思う。かつては人々が生活の必要にもとづいて制作したが、美術工芸といったイメージは弱かっただろう。それでも



より美しくという志向はあっただろう。隣の南風原には織物の歴史がある。

南城市でも、近年、取り組む人が増えているように思う。

首里織の**福木工房** つきしろの街にある。本格的な首里織。

美しさに見とれる。首里織は高級品だ。なにせかつては首里士族専用だ。いまでも高価で、県内より東京で売られることが多いとのこと。ところが、私たちでも手



の出る範囲でお分けくださること。すぐにといいわけにはいかず、注文して、ゆったりとできあがるのを待つ。

写真は、その作品。

今、我が家を飾っている。



びんがた工房「創布」 當山雄二さん

我が家から歩いて一分のお隣さんだ。

私の好きなフクロウ作品を購入し、我が家に飾っている。



南城市のがんじゅう駅で、びんがた体験を主催なさったので、私も参加

色付け完了

この後の処理は、當山さんがやったださる。

色付け作業は1時間足らずで完了

仕上げ作業は、當山さんにお任せ。



後日、完成品を届けて下さる。



南城祭りでの**藍染め**体験

富里で長年、藍染めをしておられる**並河**さんが、
実施。ハンカチに藍染めをするのだ。





まずは、筆に蠟（ろう）をつけて、白い布地に字を書く。書いたものを、並河さんが藍の入った壺で、何回か染める作業。

最初は緑色だが、空気に触れると青くなっていく。染めた布をお湯で洗うと、蠟（ろう）が溶けて、布からとれる。



アイロンがけで完成。字を書くだけで、あとはすべて並河さんがやって下さる。蠟（ろう）がこぼれて、点々になっているのいい、とは並河さんの言葉。

Tシャツやかりゆしウェアも販売。



左は、別の機会に私が書いたもの

スタートしたての南城織

南城祭りで出会った。

最近スタートしたばかりで、どこかに工房があるわけではなく、素人が楽しんでやっておられる。

あちこちに自然に生えている材料から繊維をとり、とても小さな機で織っておられる。



ギャラリーN e e l

草木染め紅型筒引、というそうだ。

N e e lは、ニライカナイのことだそう
うだ。

与那原からくると、佐敷入口あたりの
国道沿い。

半島芸術祭の時に訪問

高度な芸術なので、写真には収められないものとして、**のんとみ工房**の型染め芸術品がある。以前県立芸大で教えられていた。展示してあるお宅は、美術館そのものだ。



h. 多様な 工芸

南城には、小物を創る工芸が多い。観光客むけの記念品にも大人気



アマム



ステキな小物類、沖縄記念の品々、手づくり品をたくさん展示販売。

芸術大学出身オーナーの手づくりシーサーが超人気。

写真撮影した注文者をモデルにして、シーサーを制作。順番待ち状態なので、1年ぐらい待つこともあるらしい。

斎場御嶽への道沿い。

半島芸術祭の折り、木創舎で貝細工の田島マリアさんに出会う。

各地の児童館などに出張して、指導しているとのことだ。



COCOCO 工房のヨコイマサシ作「石敢當」とカップ

アトリエは南城市役所玉城庁舎前

野菜果物での生け花

半島芸術祭のがんじゅう駅に展示



バスケットアーティスト
小川京子

サチバルで数年前まで持った工房を
具志堅に移す。さらに最近、故郷の宮古
島中心市街地に移住。

プロ作家として、世界中で個展を開く
など、活躍し続ける

左はなにげなく置かれた作品

奥には仏像



ペンタゴン

五角形は聖なる星形





球体…直径1メートル

右写真は、新しい宮古島ギャラリー「ゆい」にて撮影
「龍」など





日本刀鍛錬所兼工房

本業の日本刀だけでなく、一般向きに私が購入した書鎮なども制作。

夫婦合作とのことだ。

書鎮は、文鎮のように紙抑えに使用。

漆喰シーサー

屋我嗣俊作

右側の一点を購入し、我が家の庭の一角に置いてある。



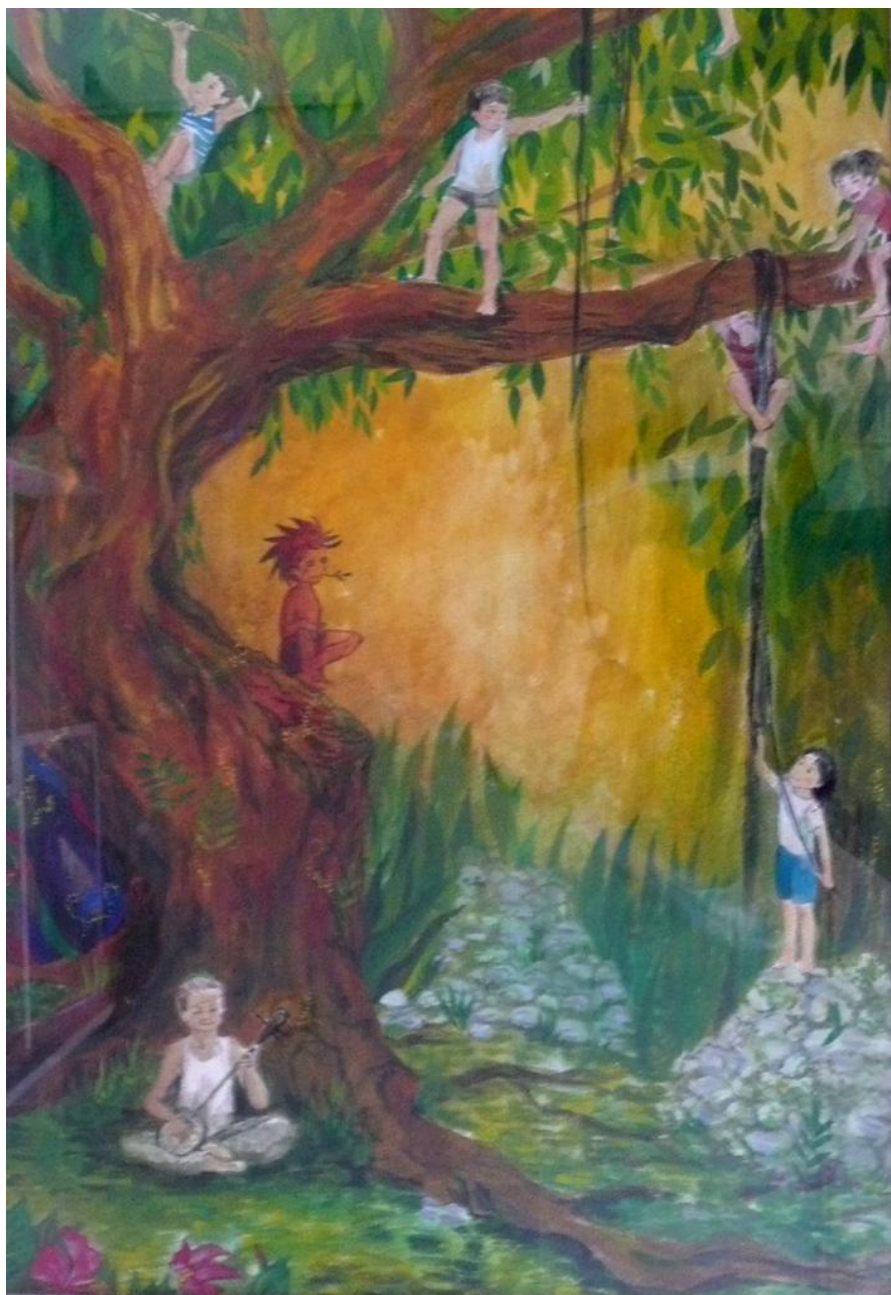
i. 絵画

南城市には美術家も多い。ここでは、我が家を美しくしている2点を紹介しよう。

まず磯崎主佳さんの作品。

近隣にお住まい。

最近の活躍は、広く知られている。



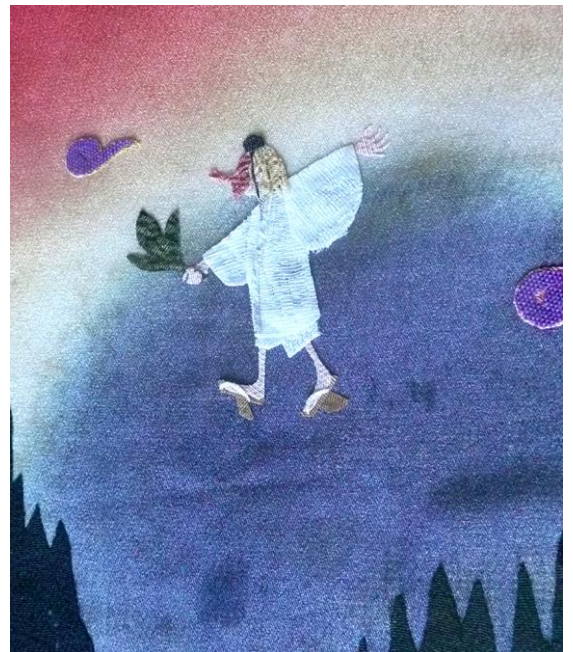
梅原龍さんの作品

彼も近隣に住む。

布絵。

布をカットして貼り付けて
作成する。

下の天狗個所の拡大写真で
は、布材料で「描かれて」いる
ことがよくわかるだろう



※ 絵画を写真に撮るというのは、
大変難しいことを、今回思い知らされた。
素人では無理だとさえ思ったが、
一応撮ってみた。

j.音楽・ シュガー ホール

南城市で音楽というと、音楽専用ホール南城市文化センターシュガーホールを思い起こす人が多いだろう。



ここでも、シュガーホール中心に紹介していこう。

シュガーホールの音楽で話題の一つは、おきでんシュガーホール**新人演奏会**だ。3月のオーディション。世界各地から若い演奏家たちが集まる。大都市でなく、沖縄の「田舎」のシュガーホールでのこのオーディションは、今や不動の位置を占め、ここでの評価をステップにして、次への発展の跳躍にする演奏家が増えてきた。

オーディションでグランプリ・優秀賞・入賞に輝いた人による新人演奏会が、5月に開かれる。

「新人」ということで、20代10代のエネルギッシュな演奏に、圧倒されるというか、おされる感じを受けてしまう。果敢に挑戦する年代だ。

音楽上の感度では、演奏についていけない私は、演奏につながる人間的な雰囲気のようなものを味わうことからアプローチしがちだ。演奏者がかもしだす、緊張感、



挑戦的姿勢、若者の遊び感覚、荒削りのなかに現れる必死さなどを感じていく。選曲、演奏姿勢などにも、それらがあらわれやすい。

それにしても、このオーディションは、世界的に

認知されてきたようだ。2012年も台湾の方が優秀賞を獲得し、その方も含めて海外で修行中の方が何名もおられる。そして、以前のグランプリ受賞者で、ベルリンのトップクラス劇場のソリストになった方もおられる。

沖縄がそうした世界の重要な「基地」になっていることは、特筆すべきことだろう。無論、地元沖縄、南城からの出演者も多い。ある年のグランプリに輝いた高校生の親は、昔の受講生だった。

ここで表彰された演奏家の「帰郷」演奏会が持たれることも多くなってきた。



南城市民ミュージカル「太陽の門」

2011年2月

前ページ写真は、終了後のシュガーホールのエントランス風景

シュガーホールのもう一つの目玉は、市民ミュージカルだ。創設以来、数回にわたって、行われてきたが、町村合併後も、2011年に「太陽の門」という作品を生みだした。

2回の公演だが、超満員。超感動を引き起こすだけのすごい演技・音楽・構成……である。

市民ミュージカルに代表されるが、シュガーホールは数々の創造的活動を展開してきたが、その中心の一人は、初代芸術監督の作曲家中村透氏だ。彼は、市民ミュージカルを中心にシュガーホールの活動展開を博士学位論文にまとめあげた。

内容は、シュガーホール活動の詳細な展開について述べながら、地域創造、音楽創造、多様な人々の協働創造などについて、きわめて斬新な理論展開、提案である。一つのホールの活動が素材だが、それが沖縄・日本はいうまでもなく、国際的にみて、言い方を変えると、歴史的にみて、すごい問題提起を行っていることを、理論的に解きあかしている。

そんなシュガーホールに、私も運営審議会委員として、かかわることになった。

シュガーホールは、3年前に南城市合併にともなって、南城市文化センターとなり、より新たなスタイルを創造していくことに直面している。

シュガーホール運営審議会で、ホールの運営と方向性をテーマにワークショップ行う。写真のよ



うに、わずか15分で100以上の豊かなアイデアがいっぱい登場。これらをもとに、たくさんの議論が発展。私がコーディネーターをつとめた。

委員になった2009年に私は、こんな学習ノートをしたためた。

——シュガーホールのこれから——

1) 音楽専用ホールとして、クラシック音楽を中心にして、豊かな音楽の世界を、佐敷・南城にもたらしてきた。そして、地域の外へも豊かな音楽文化に触れる機会をたくさん提供してきた。

その蓄積を生かし継続していくこと。そのなかで、地元の音楽的雰囲気・力量を育てていくこと

2) 近年とくに充実した取組をしているのは、地域の伝統芸能にかかわってである。地域の伝統芸能を掘り起こし、発表し、交流し、さらには創作活動まで展開している。南城市らしい芸能文化をさらに発展、とくに現代的に発展させていくこと。

3) 1) と2) とを結びつける活動を展開していくこと。すでに、これまで製作された町民ミュージカルにはそうしたものがあるし、それ以外にも追求されてきた。それをさらに発展させていくこと

4) 町民ミュージカルや合唱団など、住民参加でいろいろな取組をおこなってきた伝統を継承発展させていくこと。

次年度に、市民ミュージカルをおこなう企画が準備されつつある。それが大きな踏み台になるだろう。旧佐敷だけでなく、知念、大里、玉城の住民の新たな参加の広がりが期待される。

5) 住民多数の多様な参加の広がりを生みだしつつ、それに専門的深みをもたせていくことの追求が大切になる。芸術・音楽の質としても高水準のものを、これまで以上につくりだしていくことが求められる。

6) シュガーホールの働き手を確保・育成していくこと。職員、運営委員は当然のことながら、多様なボランティア、あるいは多様な連携組織を築き上げながら、シュガーホールが築き上げてきた文化を長期にわたって継承発展させることができるようにする。

全国各地の文化施設のなかで危機的状況にあるところでは、職員に大半がおんぶされる運営体制になったりして、職員が配置転換すると、うまくまわらない状況が生まれる例が結構みられる。そうしたことに陥らないような工夫が必要だ。

7) 市内の学校などの諸機関・施設が、シュガーホールをもっともっと活用するようにしていくこと。たとえば、校内の音楽行事を、シュガーホールでもつことなども推奨したい。また、市内の学校の連携・合同の音楽企画があるのもいいだろう。

市内にある音楽関係サークル・グループなどが、シュガーホールをもっともっと活用するようにしていくこと。

8) 全国的にみると、自治体「文化施設」は、財政問題など厳しい状況にある。指定管理者制度なども登場してきている。そうした「危機」状況を、積極的に超えていく工夫をしていく必要がある。

9) 南城市の組織機構では、シュガーホールを担当する文化部門と、観光部門とが、一つの課にまとめられている。その良い点を生かし、南城市を訪れる観光者に、南城市の文化・シュガーホールの文化行事などを、共有してもらうことを追求したい。

10) 南城市政のなかで、シュガーホールの位置が、十分には「落ち着いていない」。たとえば「佐敷シュガーホール」という印象をまだ脱皮しきれていない。その意味で、4旧町村の住民が積極的にかかわるようにしていきたい。

と同時に、市政においてリーダーシップをとっている議員・幹部職員・地域有力者たちの方々にシュガーホールについての認識・評価をもっと高めてもらうと同時

に、シュガーホール発展のための提案・支援・寄与をお願いしていきたい。

「太陽の門」終了後の2011年春には、次のようなメモをしたためた。

5年前まで、シュガーホールは佐敷のまさに文化センターであり、その中心には何度か上演した町民ミュージカルがあった。5年前、南城市の文化センターになったが、佐敷時代の蓄積を継承し、南城の広がりを生かすミュージカルになって、「ほっとした」だけでなく、それだけの豊かさというか厚みというか、それらのドラマ性を感じさせる作品 になった。

「継承」と書いたが、単なる「継承」と言うよりも、「新バージョン」という印象だ。この「継承」と「新バージョン」ということにかかわって、コメントしていこう。

まず市民参加ということは、まさに「継承」である。目に付いたのは、小学生をはじめとする若い層の出演がすごく多いことだ。2回公演をダブルキャストで行えるほどの人数だ。地域芸能の参加、また市内在住の幅広い専門家の関与をすごい。

製作過程がよくわかる、ニュースが市民だよりと共に毎月配られたのも、市民に制作雰囲気味わってもらおう点でとてもよかった。

観客も、市内各地からたくさんで、前売券完売のため会場内に臨時席をつくるほどだった。知り合いもたくさんいた。中山の近所のかたが、「シュガーホールはいつも女性が圧倒的に多いが、今日は男性も結構来ているね」とおっしゃったが、そうかもしれない。

子どもたちも含めて、出演者の圧倒的多数が素人なのだが、素人らしさ丸出しではなく、素人にしては超でき過ぎの演技だった。それには、演出関係者や歌唱指導者たちの見事な指導が反映しているだろう。

と同時に、舞台構成の仕方の卓越さが光る。個人の演技力歌唱力に過剰依存する

ことなく、集団構成による美しさを見事に作り出していた。演出家は、わらび座所属だが、30年、40以上前にしばしば鑑賞したわらび座の雰囲気はより洗練されて出ているように感じた。

音楽にしてもそうだろう。音楽素人の私にはわからない世界だが、ミュージカルの本場で鍛えられた作曲者の力量が存分に発揮されていたのだろう。

シナリオのしたたかな面白さも、舞台表現の厚みを作り、深い感動の源となっている。

人間—自然—シームンの三者のかかわりが、現在と過去、そして現実と空想との往復関係のなかで、見事に構成されている。アブチラガマやタマグスクを想起させ、かつシリアスな素材でありながら、シリアスさと並行して、なじみやすさ、コミカルさをも表現するものであった。

こうしたものが、ドラマ性溢れる（溢れ過ぎ？）な物語展開を生み出し、飽きるどころの話ではなく、息つく暇のない舞台を作り出した。

こうした大規模な表現が、今沖縄の各地で噴出している。それらが、既存の表現ジャンルに新たなものを付け加えつつあるようだ。

早くも「再演はないの？」という声が聞かれるほどだが、このあとの展開はどうなっていくのだろうか。楽しみであるだけでなく、シュガーホールにかかわる私自身も考えて行かなくてはならない課題だ。とくに西洋音楽演劇系の文化、学校を中心とする文化、創造的世界も伴う伝統音楽芸能など、そうしたものをいかに相互にかかわらせてより豊かな発展を生み出していくか。すでに、今回の公演で一つの金字塔的回答はでてはいるが、その先をどうするかは、未踏の世界だ。

南城市の文化センターとして出発して4年が経過し、これまでをスタート第一期だとすれば、これからは新たな第二期の始まりだろう。その第一期のしめくくり、

集約としてミュージカルが位置づく。

南城市には、様々な文化資源がある。音楽専門ホールであるシュガーホールにふさわしい西洋音楽を中心とする音楽愛好者の資源、それには合唱団、大規模な人口をもつ学校音楽、また市内外在住のプロ・セミプロの方々がいる。シュガーホールの音楽企画には年間数千人が集う。

さらに、南城市には多くの民俗芸能が保持されるだけでなく、今一層発展しているものも多い。古典音楽・民謡・琉球舞踊などをたしなむ人は何千人いるか、わたしには分からないほどの人口だろう。また、「半島芸術祭 in 南城」などに集う陶芸などのプロ・セミプロの芸術家・工芸作家たちが制作活動している拠点は何十、いや百を超すかもしれない。さらに、安座間サンサンビーチで行われるストリートダンス全国大会に見られるような熱気あふれる大群が存在する。

そうした多彩で大量の動向と、シュガーホールはどうかかわっていくのか。それらは、政治経済産業などの営みとならんで、南城市の大きな一角を占める営みである。観光による振興とも大きくかかわる。自治体行政のなかで、あるいは住民生活のなかでの、シュガーホールの位置・役割といったものを改めて考え、より広大な構想を考える必要があるようだ。「太陽の門」を代表的なものとするシュガーホールの企画が、南城の日常にどう関わっていくか、という視野も求められよう。私流にいうと、「南城おこし」の一角をになうシュガーホールとして考えていきたい。

視野を「太陽の門」に絞ると、今回行われた、ジャズと三線音楽、獅子舞とミュージカル、沖縄芝居とミュージカルといった、「クロスカルチャー」の交流が、新たなものを生み出したが、それをいかにより豊かなものへとつなげていくのか。プロ・セミプロ・アマとの協力をどう発展させるのか、といった現実的夢の実現の課題がある。それは、市内だけでなく、各地へ、おおげさにいうと世界への発信ともいえよう。

このように考えると、現時点のシュガーホールは大きな課題・夢実現への道にいる。無論そこには、大きな壁というか、茫漠とした海原というか、そうしたものも同時存在している。

今後の発展創造に期待したい。